

《巻頭言》

台湾の歴史教科書における日本統治の評価



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

日本近代史研究の碩学から、日本の中学校に相当する台湾の国民中学で使用されている歴史教科書の「日治時期」に関するページのコピーが手に入らないかとの相談を受けた。できれば日本語に訳してほしいという。

早速、台湾に住む友人に頼んで、日本の文部科学省に当たる教育部が指定している4社の歴史教科書のうち、広く流通している南一書局、康軒文教、翰林出版3社分のコピーを送ってもらい、手分けして作業を始めた。「日治時期」とは、即ち日清戦争で勝利した日本が日清講和条約（下関条約）に基づいて、敗北した清朝より台湾の割譲を受けた1895年4月から、第2次世界大戦後の1945年10月までの50年間である。

かつて、38年間に亘って戒嚴令下にあった台湾では、中国4000年の歴史を「自国の歴史」、中国大陸の地理を「中華民国の地理」として学校で教えていた。国共内戦に敗れて台湾に逃れてきた蒋介石率いる国民党政権が、中国大陸をも「中華民国」としてきたからである。当時の生徒たちは「万里の長城」や「長江」は知っていても、17世紀初頭にスペインが台湾に上陸した際に建てられた台湾に現存する最古の建築物「紅毛城」や台北市内を流れる「淡水河」のことは習わなかったという。

「日治時期」を含め、「台湾の歴史」を描いたテキストが登場したのは、1988年1月に李登輝政権が誕生して以降のことである。李登輝による台湾の自由化、民主化の流れの中で生まれた歴史教科書『認識

台湾』である。『認識台湾』は歴史編以外に地理編、社会編があり、その後、2000年5月に発足した陳水扁政権の下でのカリキュラム再編によって、社会学習領域へと組み込まれて消滅したが、その内容は今でも『認識台湾』を踏襲した形となっている。

3社の歴史教科書における「日治時期」の部分は、表現は多少、異なるものの内容は基本的に似たり寄ったりで、日本が台湾近代化のために取り組んだ事業が肯定的に紹介されている。「社会風俗の改良」の項では「立て続けに西洋式の病院、水道、トイレといった医療施設や公衆衛生設備が設置された。（中略）結果として、台湾の死亡率は下がり、人口は激増した」とあり、更に「1週間7日制、1日24時間制を導入し、工場、学校、鉄道交通と、いずれも固定の時刻表が取り入れられた。（中略）これによって人々の日常に時間厳守のルールが習慣化された」と記されている。

勿論、当時、日本人による台湾の人々に対する差別や搾取が少なからずあったことも事実である。例えば、歴史教科書では、1930年10月に先住民が起こした霧社事件のような抗日蜂起にも触れており、その原因を「林木や樟腦といった資源を掠奪し、先住民の生活空間を圧迫した上、彼らに強制労働を課した」とことにあると解説している。それでも、台湾と同じく日本統治の歴史を有する「あの国」の「歴史認識」とは全く逆であることは確かである。